

吉村庸*・山中二男**：四国のチズゴケと蛇紋岩上の固着
地衣 *Pertusaria* について

Isao YOSHIMURA* & Tsugiwo YAMANAKA** : Notes on *Rhizocarpon geographicum* f. *atrovirens* in Shikoku and *Pertusaria* on serpentine

私たちはさきに、今まで四国からたしかな記録のなかったチズゴケが、剣山系の珪岩上に群生することを報告し、今後四国山地の高所では、ほかにも見出される可能性のあることを指摘した(植研 36: 311—312, 1961)。その後、私たちの採集調査により、今日までに次の各地に産することをたしかめた。

剣山系：剣山、1650—1950m, 珪岩；ジローギョ、1770m, 珪岩；白髪山(奥白髪山)、1670m, 珪岩；三嶺、1850—1890m, 珪岩；三嶺—西熊山、1720—1760m, 珪岩；西熊山、1810m, 緑色千枚岩；イザリ峠、1780m, 珪岩；天狗塚、1650—1800m, 珪岩。

石鎚山系：冠山—笹ガ峰、1780m, 緑色片岩；笹ガ峰、1780—1820m, 緑色片岩；寒風山、1700—1730m, 緑色片岩；筒上山、1820m, 結晶片岩の礫を含む礫岩；石鎚山天狗塚、1900—1980m, 安山岩；同西冠嶽、1800m, 安山岩。

赤石山系：東赤石権現山、1530m, 榴輝岩；東赤石山—二ッ嶽、1550—1630m, 角閃岩。

以上のうち前報にもふれたごとく、剣山系の珪岩上でもっともよく群落が発達していて、石鎚山系では量的には少ない。また、赤石山系ではまれである。垂直的には1650—1700 m 以上に多いが、赤石山系のように1600 m 以下のところにも生ずる場合がある。このチズゴケにともなって生育が見られるおもな地衣類としては、*Lasallia asiae-orientalis*, *Gyrophora kisovana*, *Phylliscum japonicum*, *Sphaerophorus fragilis*, *Bryopogon chalybeiformis*, *Parmelia stygia*, *P. shinanoana* などがあり、亜高山—高山帯の要素が多い。

このようにチズゴケは、珪質の岩上に多く、火成岩の場合は酸性—塩基性の岩上に見られる。ついでながら、剣山や筒上山では、頂上の花崗岩の三角点標石にも着生している。それにたいして、蛇紋化した超塩基性岩上では、四国ではまだやはり見つからない。蛇紋岩上では、かようにチズゴケが見られないかわり、ここには *Pertusaria* の一種がいちじるしく群生しているのが注目される(写真参照)。蛇紋岩が風化して黄褐色がかった岩肌に、この *Pertusaria* の白いしま模様は特徴的である。ヨーロッパ、た

* 高知市朝倉，高知学芸高等学校。Kôchi Gakugei High School, Asakura, Kôchi.

** 高知市朝倉，高知大学教育学部生物学教室。Biological Institute, Faculty of Education, Kôchi University, Kôchi.

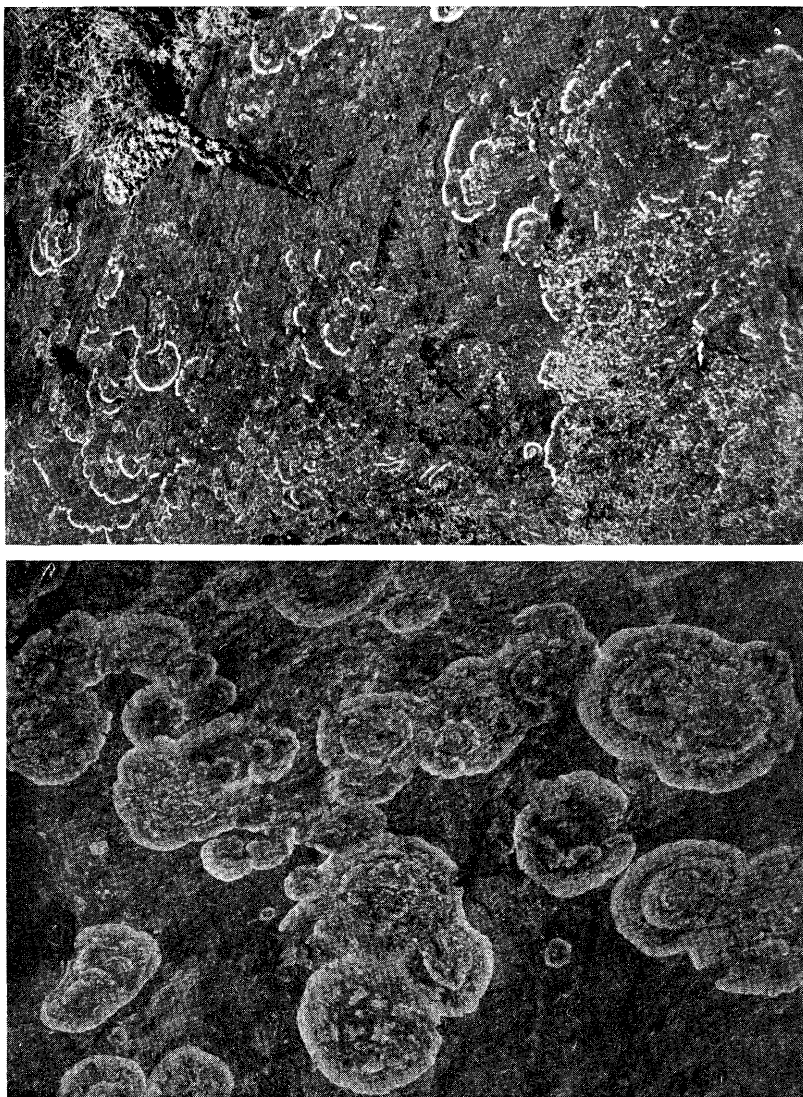


図 1—2. 蛇紋岩上の *Pertusaria* sp. (愛媛県東赤石山頂上付近にて).
Pertusaria sp. on serpentinite (Mt. Higashi-akaishi, Ehime Prefecture).

例えばスエーデンなどの北欧では、*Caloplaca elegans* が蛇紋岩の露出岩壁に多く、そのために Røberget という山の名もできているというが (Rune, O.: Acta Phytogeogr. Suec. 31: 21, 69, 1953), 日本とくに四国の蛇紋岩の山では、もちろんそのような例は見られない。また、*Pertusaria* のなかまは、Rune の上記の論文にはなにもふれられていないので、蛇紋岩の露出岩面を特徴づけるこのような地衣は見られないものと思われる。なお *Rhizocarpon* についても、*R. geminatum* が一カ所にでているほかは記録がない。日本では、チズゴケが至仏山頂から報告されるように (朝比奈泰彦: 植研 27: 376—379, 1952), まったく蛇紋岩上に生じないものとはもとよりいえない。この *Pertusaria* はなお専門家の研究にまたねばならないものであるが、少なくとも蛇紋岩とは密接な関係のあることはたしかなので、ここにそれを明らかにしておきたい。

終りに、御教示いただいた黒川進氏にふかく感謝する。

Summary

In Shikoku, *Rhizocarpon geographicum* f. *atrovirens* is generally found from 1600—1700m upwards, occurring on various rocks, such as quartzite, andesite, eclogite, amphibolite, phyllite, and crystalline schists. This lichen is not found on serpentine. Exposed serpentine and serpentized rocks are occasionally characterized by the abundant occurrence of *Pertusaria* sp. (see photographs).

○ 鬱陵島の苔類 (洪元植) W.S. Hong: Hepatics collected on Isl. Dagelet, Korea

泣いて来て泣いて帰るという島…鬱陵島を訪れんとせば、誰もが東海の荒波と闘う船路に酔泣きし、離れるときはまた、島の美しい山河と人情に泣くという陸地では到底考えられぬ話を持つ鬱陵島は、韓国の東海で一番大きい島であり、また、韓国の最東端で、東経 130°47'—130°55', 北緯 37°27'—37°33' に位置する東西約 12 km, 南北約 10 km, 周囲約 44 km, 面積約 75.4 km² に達する東海の孤島である。島の全形は猫顔状の不規則な五角形をなし、火山の中心である羅里洞盆地は島の最高峯である 聖人峯 (986 m) の北に位置し、旧噴火口と認められ島内最大の平原である。

鬱陵島の気候は風強く雨と雪が多いが特に冬の積雪は有名である。一方、夏は冷しく冬はまた暖いので Köppen の気候区分では cfa 区に属し温暖湿润気候である。島の緯度が木浦、麗水、釜山等の南海岸地域より 2.5° も北の方に位置しているに拘わらず南海岸地域に産する 暖帯常緑闊葉樹中この島に分布するものは 14 種の多数に達している。このように鬱陵島が特殊な気候地区をなしておるのは、日本本州の西側から東北側に流れる暖流がこの島の附近を通して北上してからさらに北の方から流れる寒流と相会